

北斗崇拜に関する南方熊楠の手紙

吉川寿洋

中山太郎は「学界偉人 南方熊楠」(富士山房)の中で、南方熊楠の「学友及び門人の高足に送った千通にも近い書簡」について触れ、その「書簡たるや、全く常人の想像だにも出来ぬもので、翁の多方面に渉る造詣と蘊蓄とを披歴したものであって、筆者が耳聞目睹したものだけでも、概ね次の如きものがある」として、左のような簡単な分類をこころみている。

仏教仏典に關しては 土宜法竜師へ
植物学に關しては 白井光太郎氏へ
神話童話に關しては 高木敏雄氏へ
民俗伝説に關しては 柳田國男先生へ
粘菌学に關しては 小畔四郎氏へ
淡水藻に關しては 上松壽氏へ
人類学に關しては 平沼大三郎氏へ
特殊風俗に關しては 岩田準一氏へ
植物菌類に關しては 北島修一郎氏へ

というのが、それである。現在発見されている書簡はほんの数通の域を出ないが、右の分類項目以外に

道教に關しては 妻木直良氏へ

の一項を加えたいというのが、わたしの考えである。

妻木直良については、先に「死と赤色に関する南方熊楠の手紙」を紹介した際に、その略歴を付したので、ここにくり返すことは、なるべく避けたいが、熊楠から柳田國男に宛てた書簡の中などに、しばしばその名を見ることが出来るし、わたしが熊楠について多くを教えられた笠井清氏の「南方熊楠」(吉川弘文館)にも、「また粘菌によって人間生死の一大事の哲学まで思索して、道教の權威で陸軍大学教授の妻木直良に説明したりしている」とその名が見え、同じく、その末尾に付された年表の明治四十二年の条に「夏、陸軍大学教授で道教の研究家の妻木直良来訪」の一行がある。ただし、直良没後知友の手によって出された「追悼録」付録の略年譜中には、直良は東京高輪六輪大学講師であった記述はあるが、陸軍大学教授であつ

たという記録はない。直良師の御令息で、紀伊湯浅本勝寺十七代住職妻木端雄師に、このことについて直接うかがった折にも、そのような事案なしのことであった。これは、おそらくは、熊楠自身の聞き違いに端を発しているものと思われる。例えば、昭和六年八月廿日の岩田準一宛書簡には「本と当国在田那栖原の善無畏寺は明恵上人の開基で徳川の末年より明治十四五年迄住職たりし石田冷雲てふ詩僧ありし、あんまりよく飲むので割合に早世されたれ共、就て漢學を受し弟子共が明治大学長たりし木下友三郎博士、郵船会社の楠本武俊（香港支店長又ボンベイ支店長）、其他十を以て數ふべき知名の士あり。その冷雲様に陸軍大学教授たりし日本一の道教研究者妻木直良師あり」（乾元社版「南方熊楠全集」8）のごとき一文があり、熊楠自身、直良を陸軍大学教授と誤って記憶していた形跡がある。あるいは、六輪大学を陸軍大学と聞き誤ったのかもしれない。ちなみに、石田冷雲が栖原の施無畏寺住職であったというのも熊楠の記憶の誤りで、冷雲は栖原の極楽寺の住職であった。さらに直良は冷雲の息ではなく、冷雲の次男僧暢の長男にあたる。したがって、明治四十五年二月十一日付柳田国男宛書簡の「前度御申し越しの妻木氏は、木下友三郎氏の詩の師、故石田冷雲と申す大酒飲僧の二男にて」なる記事は、冷雲の次男僧暢のことをさすと解するの誤りで、直良のことを言っていると見るべきである。

直良宛の熊楠の書簡は、死と赤色に関する長文の手紙と、その十日後にしたためられた大正二年五月二十五日付の葉書ののち昭和四年六月まで空白になっている。その後、手紙を出さなかったのか、それとも散逸してしまったのかは明らかでない。一般に、熊楠の手紙の特徴は、中山太郎も前掲書において指摘しているように、「必

ず書き出しと書き終りの日時を認めてある」ことや一つの手紙文がほとんど一つのまとまった論文の体裁をとっていることなどに存するが、そのほか、柳田国男宛書簡に見るごとく、堰を切ったように、次々と同一人にあてて書き続けられたかと思うと、ある時期を境にぶつ切り途絶えてしまうことがままあることを考慮すると、この間の手紙は書かれなかったとみるほうが正しいかも知れない。

京都市上京区岡崎町宮昭二二

妻木直良様

紀州田辺中屋敷町五二

南方熊楠拝

大正二、五、二五

の表書をもつ、先の死と赤色に関する手紙のおぎないのために書かれた葉書の内容は、次の通りである。

拝啓 前日申上シ刑死人ニ赤色ノ花鬘ヲキセ候事ハ、義浄訳根本説一切有部毘奈耶雜事卷二十八大藥ノ伝ニ、大藥王女ヲ娶リシ後、將餘女顔容美麗。以妙莊飾引入宅中。報其婦（乃チ王女）曰。此之少女是王宮人。我愛將來勿傳斯事。婦大ニ忿リ王ニ告グ。王魁僧ヲシテ大藥ヲ刑セシム。時ニ旃荼羅以赤穩花繫於頸下。打惡声鼓惡人随逐。拏刀怖懼如瓊魔卒送向戸林云々。僧祇律十九ニハ刑死ノモノニ迦毘羅花鬘ヲ著セルトアリ候。穩ハ苗秀デタル貌デ赤一花ハ何ニカ特種ノ花ノ名ト存候。迦毘羅ハ其梵名ナルベシ。先ハ右申上候。この葉書の表書によっても分るように、当時、直良は京都にあって真宗全書の編纂に主任としてあたっていた。なお直良の其の後を

「湯浅町誌」より引くと「大正五年仏教大学（＝竜谷大学）講師兼平安中学校教諭に任ぜられ、ついで同九年同大学教授となり、真言宗京都大学の講師、京都女子高等専門学校講師を兼ねた。昭和元年本勝寺住職となり、同二年竜谷大学教授を辞して、同四年和歌山高等商業学校講師を嘱託されたが、六年辞職」ということになる。よって、昭和四年六月に出された熊楠の葉書は有田郡湯浅町が宛先になつてゐるが、文面より判断するかぎり、かなり長い間にわたつて書信の交換は途絶えていたものと考えられ、この間の書簡が散逸したとみるより、手紙を交すことがなかつたとみるほうがやはり適切であろう。内容的には特別注目すべき点は認められないが参考までに、この時の葉書を以下に引く。

在田郡湯浅町

妻木直良様

西牟婁郡田辺町中屋敷町三六

南方熊楠

昭和四年六月七日午後二時

拝啓 先日注文セシアニチーゾムノ書齋動より本日午後一時到着

セリ。因テ早速郵送申上ント欲スルモ、貴下ハ今ニ貴地ニ在リヤ不詳。貴地ニ在ラバ、湯浅町ノ何トイフ町ノ何番地トイフ事ヲ御知セ被下度候。小生ハ従来住地ノ定カナラヌ人ニ物ヲ送ツタ事ナシ。早々以上。

この葉書のあと、二年ばかりたつて書かれたのが、次のような封筒の表と裏書をもつ、北斗崇拜に関する手紙である。以下にその全文を掲載して、おおかたの参考に供したい。

本縣在田郡湯浅町中四四五

本勝寺

妻木直良様

西牟婁郡田辺町

中屋敷町三六 南方熊楠再拝

裏 昭和六年

二月二日夜八時半

昭和六年二月二日夜八時半

妻木直良様

南方熊楠再拝

拝啓其後打絶エ御無沙汰ニ打過申候。拙方不相変病人ノ絶エ間ナク、ソレガ為メ色々俗事ガ小生ノ肩ニ懸リ来リ候ニ、大ニ御無沙汰到候。前日送り被下候本邦ニ道教思想ガ入り候事ニ関スル文献目錄及ビ其ノ叙述ヲ一寸拝読セシニ、北斗（又北辰、北斗ト北辰ヲ混視セシ事ハ支那ニモアリ）尊崇ニ関スル習俗ハ、専ラ道教ヨリ移リ来リシヤウノ御意見ナルニヤト拝察致候。果シテ然ラバコレハ多少ノ考慮ヲ要ス。ト申ス訳ハ、印度ニモ亦支那ト等シク古来北斗（又北辰）ヲ崇拜セシ事書籍ニ明カナリ。只今一寸座右ニアル書ニ就キ少許抄記シテ、左ニ御覧ニ入レ候。コレラハ現今ノ習俗ヲ目撃ノママ記シタモノナレドモ、前後左右より推スニ、決シテ支那ノ風ヲ傳習セシ者トハ思ハレズ候。小生只今多用ニテ一々証拠ヲ上ゲ得ザルモ、佛經（漢訳又ハ支那仕立テノ）ニモ北斗北辰崇拜ノ事ナキニ非ズ。ソノ儀制等ヲ案ズルニ、悉皆ト迄ハ支那在来ノモノニ非ズシテ、印度よりノ所傳ニ見エタル事ナキニ非ズ。

A. M. T. Jackson (此人死後、ソノ集ヲ R. E. Enthoven トイフ人ガ参輯出版セシナリ)ノ Folk-Lore Notes, vol. I. Gujarrat, Bombay, 1914. 廿三頁ニ云ク、北斗（サプタールシ）ノ輝ケル北星ハカーシヤパ、アトリ、プハーラ、ドワージ、キシヌワーシラ、ガウタマ、ジャータダマグニ、ヴシシュトハノ七聖（ソレノ委陀ノ

各部ニ通ジ神ノ如キ重名アリシノ化現トイフ、或ハイフ、一獵師ト其一族ガ知ラズノ大功徳ヲ施シタノデ、北斗ノ七星トナレリト。シヴラートリ。マーハートミヤニ抛レバ、此獵師シヴラートリ

(黒月ト白月ノ十三日メノ日デシバヲ崇ムル日也) 日ニ、借金不濟デ禁獄サレ、獄中デシヴノ信徒ガシヴノ唱フルヲキキ、訳モ知ラズニ之ヲマネビシニ、其夕ニ至リ放タレシモナホ唱エテ止マズ。

此一日彼レハ食ヲ受ケズ。随ツテ、殊ニ断食シテオガンダワケトナル。ソレより自分ト一家ノ食ヲ得ントテ、ベル樹(シヴノ愛スル樹)ノ後ニ隠レテ水ヲノミニクル鹿デモ射テ取ント、弓ニ矢ヲ矧デマツ内、不覚ベル樹ノ葉ヲ摘デ地下スト、樹下ニ立居タシヴ陽相像ニ落チ留マツタ。コレデ知ラズノシヴラートリ日ニベル葉ヲ捧乍ラシヴヲ拝シタワケニナツタ。(シヴハ此樹葉ヲ三枚ソノ像ニカブセラレルヲ喜コブナリ) 此ノ間タモ彼レハシヴヲ唱エテ止マズ。又ツヅケテ断食セリ。依テ過去ノ罪ヲスツカリ免サレ、一族トトモニ天上ニ登ルヲ得ト。

二五頁ニ言フ、諸星宿ノ内ニ北斗ハ尤モ麗シバ崇拜サルルモノナルベシ。童子ニ聖絲ヲ結ブ時及ビ婚儀ニ北斗ヲマツル。婚儀ニハ婚姻ニ立會ヒ、又新夫婦ヲ守護シ、吉祥ナラシメモラフ為ニ之ヲマツル。之ヲマツル一法ハ地上ニ北斗ヲ画ケル赤ト白ノ布片ヲシキ、小麦ト米ヲ其上ニマキ、^{清牛脂}(ギー)デ燈ヲ点シ、赤紫銅ト諸花ヲササグ。又一法ハ木ノ^{バニトラ}胡床上ニ紫銅デ赤点七ツヲ記シ、其上ニ小銅錢(Pice)七ツヲ擲椰子七ツヲ置ケバ新夫婦ソノ銅錢ヲ拝シテ後チ胡床ヲ七匝シ、一匝毎ニ足ノ大趾モテ胡床ニ触ルベシ。諺ニ云ウ、何事ガ此夫婦ニ起ルトモ、七小銅錢ハ確カナリト。(極メテ寒貧ニハナラヌトイフ事ナルベシ) 第三ノ法ハ上等米^{カモット}(Kamod)ヲ積テ七

小堆トナシ、新婦其右足ヲ一ノ上ニオキ、ソノ每新夫一米堆ゾツヲトリ去ル也。

ブハードラパッド(グジャクチ印度人ノ第十一月)ノ白月ノ第五日ニ北斗ヲマツリ断食ス。梵種ハドハールバ^{カヤ}茅デ上述ノ七聖人像ヲ作り、之ニヴシシユトハ(第七聖)ノ妻アルシドハチー像ヲ加ヘ十六度拜(シヨダシヨパチャール)法ヲ以テ拜ム。カクテ祖先ノ冥福ヲ得ルトイフ。又梵種ハ毎年^{ゴコナトイ}椰子日(シユラーヴァン月ノ白月ノ第十五日)北斗ヲ拝シ、聖絲ヲ更エル。(聖絲ハ肩ニ佩ル糸)ヒンゾ人ノ水夫亦此日北斗ヲ拜ス。

ニルルパールヴン儀モテ先^カ此ヲ追善スルニ牝牡ノ少年牛ヲ婚合シ、百八人ノ梵士ヲ一時ニ響スルヲ要ス。又ヴスツ儀ハ新ラシキ家ニ移住スル前又ハ当日行フ。此ノ両儀ノ節ニ物ヲ焚ト北斗ニ供エテ拜スルヲ要ス。

婚儀ニ同心絲ヲ結ビ了リテ、スグサマ夫婦ハ北辰(北斗ニ非ズ、北辰五星中ノ第一星ヲイフ)ヲ眺ムルヲ要ス。爾後イカナル盛衰ニアフトモ動カザル事北辰ノ如ク、寿長キ事北辰ノ如クナレト祝フ心也。

北斗七星中尤モ暗キ星(七星中ニ一ツ他より暗キモノアルヲイフ。樞・璇・璣・權・玉衡・開陽・搖光、此の内一ツ他より光リ弱キモノアリケリ。其名ヲ忘レ申候)見エナクナレバ、其人ソレより六月中ニ死ス。又人有テ天河ヤ北斗ヲ見能ハズナレバ、近ク命終ルナリ。

先ヅハコンナ事ナリ。佛經中ニモ似タ事アリシヤウニ思フ。故ニ吾邦ノ北辰北斗崇拜ハ必シモミナ支那道教ニ基クニ非ズ。中ニハ佛典より印度ノ古俗ヲ傳ヘシモ見ヘシト存候。

色々多用且ツ郵便ノ切時刻迫ル故右ノミ申上候 敬具

注

(1) 「近畿民俗」(第五十八号)

(2) 「近畿民俗」(第五十八号)にて、この「石田冷雲と申す大酒
飲僧の二男」の部分で僧暢のことをさすものと解したのは
誤りにつき、以上のように訂正する。

(和歌山工業高専)